

安行植木の開祖

# 吉田権之丞

名不江戸百景

## 花屋

吉田権之丞



緑屋

植木の開祖  
吉田権之丞翁記念碑

川口市長岡村幸四郎吉



財団法人 川口緑化センター

# 安行植木の開祖 吉田権之丞の生涯

安行植木の祖とされる吉田権之丞。彼の最大の功績として伝えられているのが、明暦3年(1657)の江戸大火の後、安行の地域から植木・苗木・草花等を送り、江戸の町の復興に役立てたとともに、この頃から安行村は苗木の育成、草花の栽培を主な産業とするようになり、現在の世界的に有名な植木産地として、その隆盛を見るに至ったということにあります。

しかし、吉田権之丞の生涯に関する詳しい資料や、その当時の植木産業の資料などは現存していません。子孫の吉田家においても、大正12年の関東大震災に被災し、それらの資料が喪失してしまいました。されど、吉田権之丞の功績は、安行の植木産業関係者の中で言い伝えられ、没後300年の時を経て、その存在感は人々の心の中で生き続けています。

ここでは、吉田権之丞の生涯を判っている範囲で紹介し、当時の江戸時代における庶民生活と植木のつながりについて考察していきます。

## 吉田権之丞の誕生

吉田権之丞は、寛永12年(1635)に附島村(埼玉県旧浦和市)の吉田家に生まれたという説と、安行村で生まれたという二つの説があります。しかし、今日まで伝えられてきたところでは、本家といわれる附島村の吉田家で生まれ、分家した先が、安行村の吉田家ではなかったかとされます。

子どもの頃から花や草花が好きで、農業に専従しながらも、当時の江戸の植木産地であった染井村(現巣鴨や駒込近辺)に出かけては、植木栽培の技術を学び、安行村での庭木や花卉の栽培に成功していきました。

## 振袖火事

犬公方と呼ばれた徳川家綱が、初期の幕閣政治に取り組んだ頃、明暦3年(1657)1月18日、冬の江戸の町に北西の強い風が吹きすさぶ昼頃、本郷丸山の本妙寺から出火した火は、風に乗って次々と南進し、湯島や神田明神近辺を焼き尽くしました。雨

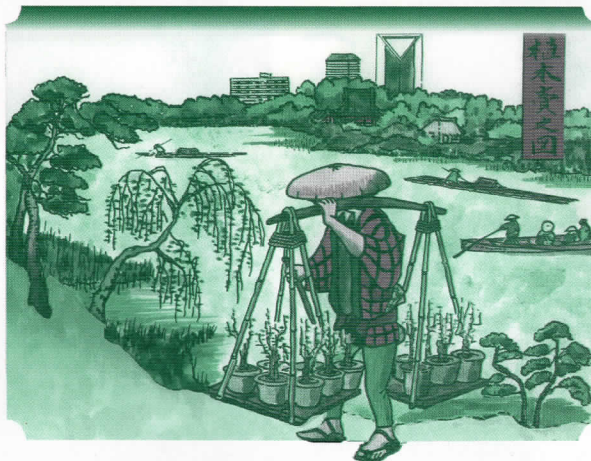
が二ヶ月余りも降らず乾燥しきっていた江戸の町は、夕方には西風にあおられ、炎が八丁堀から隅田川を越えて向島、深川までも被い尽くしました。

翌19日には、残り火が小石川から出火し、江戸城北の丸の大名屋敷から本丸、二の丸へと移り、昼頃には五層の天守閣が炎に包まれました。

この大火災の被害状況は、百六十の大名屋敷、四百町の町が焼け、ほとんど江戸全域が燃えつくされ、死者は十万人にも昇りました。

## 吉田青年の活躍

焦土と化した江戸や本郷、駒込あたりも復興の兆しが見え始めた頃、すげ笠を被り、天秤を担ぐ一人の青



年がいました。

天秤の中には、小さく揺れ動く花があり、苗木がひしめいています。この青年こそ、川口・安行の植木を世界にとどろかせた、安行の植木の祖・吉田権之丞です。

権之丞は明暦の大火後、江戸復興のために駒込近辺に緑を植えに行きます。以前、自分が茅や藁を売りに歩いた江戸。その時に植木の技術を授けてくれた方たちの顔が錯綜し、権之丞の心も、さぞ打ちひしがれていたのではないのでしょうか。

緑で江戸の町を復興させ、江戸町民のお役に立てれば、との想いが、後の安行の植木の祖となった訳です。

## 安行に伝えた植木技術

吉田権之丞が、駒込染井の植木屋から学んで、安行村へ伝えた植木の

技術は、曲げ物(盆栽仕立て)、挿し木、挿し穂、接木そしてサツキ、ツツジ、ツバキなどの花卉の栽培方法などといわれています。現在もツバキの栽培は日本一といわれ、安行の地で生まれた数多くの新品種が、全国で流通しています。

このように安行に花ものの技術を広めていった彼は、周りから「花屋」と呼ばれるようになり、現在でも吉田家を「花屋」と称し呼ばれています。

吉田権之丞が市場開発した庭木、苗木の生産が、植木栽培地として安行を開拓したことは事実であり、その権之丞は、元禄16年(1703)7月に68歳の生涯を閉じました。氏のお墓は金剛寺で祀られ、誰ともなく今でも花が添えられ、線香の煙があがっています。

## 駒込染井の植木屋

江戸名所のひとつに駒込・染井の植木屋が取りあげられています。植木屋が、園芸植物の栽培のために庭園を造り、花盛りの季節には、江戸町民の花見、遊覧の場となっていたからです。植木屋にはそれぞれ得意とする花の種類があり、手入れの行き届いた花園を公開して見物させることによって、市井の注目を得ようとしたのです。

中でも江戸一番の植木屋として声価が高かったのは、染井村の伊藤伊兵衛です。代々伊兵衛と名乗ったのですが、特に三之丞とその子政武が有名です。

## 大名屋敷の庭園

駒込・巣鴨のように江戸近郊に植木業が成り立ってくる要因のひとつに、三百諸侯といわれる大名が、その拝領屋敷内に競って庭園を造営したことがあげられます。

この大名庭園の維持や手入れに、近郊の農民が従事するうちに、次第に植木屋化していったものと思われます。駒込・巣鴨周辺にも数多くの武家屋敷があり、なかでも染井の藤堂家下屋敷、駒込の柳沢下屋敷などは、広大な庭園を構えていました。

※表の人物画は、吉田家の協力のもと作成した想像画です。